

馬産地ライター村本浩平の 2017 スタリオンシリーズ競走種牡馬名鑑

Vol. 4 | 8.22 [火] ▶ 9.28 [木] 開催分



8.31 [木]

ラブリーデイ賞 【リリーカップ [H3]】

新種牡馬

ラブリーデイは父キングカメハメハ、母ポップコーンジャズ(母の父ダンスインザダーク)の7歳馬。繋養先は門別のブリーダーズ・スタリオン・ステーションとなります。2歳時にメイクデビューと野路菊Sを連勝し、続く京王杯2歳Sでも2着に入ったラブリーデイですが、競走馬としての真骨頂はむしろ古馬となってからでした。5歳緒戦となる中山金杯をレコードで制すると、その後も重賞戦線をわかし続け、宝塚記念ではGⅠ初制覇。秋には天皇賞・秋も優勝。その年は10戦して重賞6勝という素晴らしい成績を残し、JRA賞最優秀4歳以上牡馬にも選出されます。6歳時も2度の海外遠征を行うなど精力的な活躍を続け、ラストランとなった香港Cで4着となった後に引退。繋養初年度となる今年は138頭の繁殖牝馬を集める人気ぶり。初年度産駒は2020年にデビューを迎えます。

9.13 [水]

クリエイターⅡ賞 【旭岳賞 [H3]】

新種牡馬

クリエイターⅡは父Tapit、母Morena(母の父Privately Held)の4歳馬。繋養先は新ひだか・日本軽種馬協会静内種馬場となります。昨年の米三冠クラシックの最終戦となるベルモントSで、ケンタッキーダービーをデビューから8連勝で制したNyquistや、そのNyquistをブリークネスSで退けたExaggeratorを向こうに回して勝利をあげたのがクリエイターⅡ。前々走のアーカンソーSで初GⅠ勝利をあげるも、このレースでは7番人気の評価ではありましたが、成長力の高さと、競り合いを制した勝負根性の高さを証明する形となりました。父Tapitは、昨年まで3年連続でアメリカのリーディングサイアートップとなっている名種牡馬であり、日本でも輸入馬のテストマッタがフェブラリーSを優勝。母Morenaはペルーを代表する名牝と血統背景も申し分ありません。初年度産駒は2020年にデビューを迎えます。

9.14 [木]

エスケンデレヤ賞 【イノセントカップ [H3]】

エスケンデレヤは父Giant's Causeway、母Aldebaran Light(母の父Seattle Slew)の10歳馬。繋養先は新ひだか・日本軽種馬協会静内種馬場となります。3歳のファウンテンオヴユースSでは2着馬に8馬身半差を付けて初重賞制覇。続くウッドメモリアルSでは2着馬に9馬身3/4差を付けて初GⅠ制覇を果たし、ケンタッキーダービーでは1番人気の支持を集めたエスケンデレヤでしたが、怪我で出走を回避して現役を引退。次のシーズンから米国で種牡馬入りを果たします。2年目産駒のMor SpiritがGⅠロスアラミトスフューチャリティを優勝。産駒たちは世代を問わずに重賞戦線をわかし、その実績が見込まれて2016年から日本で繋養。好馬体も評価され、繋養初年度から115頭の繁殖牝馬を集めました。初年度産駒は2019年にデビューを迎えます。

9.20 [水]

バゴ賞 【フローラルカップ賞 [H3]】

バゴは父Nashwan、母Moonlight's Box(母の父Nureyev)の16歳馬。繋養先は新ひだか・日本軽種馬協会静内種馬場となります。競走馬として重厚なイメージをもたれがちな凱旋門賞馬バゴですが、初重賞制覇や、初GⅠ制覇となるクリテリウムアンテルナショナルで勝利をあげた舞台は芝のマイル戦。しかも、すべて2歳時と、仕上がりの早さとスピードの違いを証明します。3歳時にはGⅠジャンプラ賞、GⅠパリ大賞と距離を伸ばしながら勝利を続け、芝2400mのGⅠ凱旋門賞を優勝。次の年にはGⅠガネー賞にも勝利しています。2006年から日本での繋養を開始。初年度産駒からビッグウィーク(菊花賞)、オウケンサクラ(フラワーG)ら重賞ウイナーを送り出し、今年の京成杯もコマノインパルスが優勝。近年ではトロワボヌールとアクティビューティがクイーン賞を勝利と、ダートでも優れた産駒実績を残しています。

9.21 [木]

サウスヴィグラス賞 【道営スプリント [H2]】

サウスヴィグラスは父エンドスイープ、母ダーケストスター(母の父Star de Naskra)の21歳馬。繋養先は新ひだか・アロースタッドとなります。現役時はダートスプリント界で一時代を築く活躍を残し、北海道スプリントC連覇を含む交流重賞6連勝。引退レースとなったJBCスプリントではGⅠ初制覇を果たします。種牡馬入り後も産駒たちは現役時の父を彷彿とさせる活躍を見せ、ラブミーチャンがJpnⅠ全日本2歳優駿を優勝。コーリンベリーはJBCスプリントで父仔制覇を達成します。こうした産駒の活躍もあり3度に渡ってNARのリーディングサイアーとなると、今年のジャパンダートダービーでは、ホッカイドウ競馬出身のヒガシウィルウィンが地方所属馬としては7年ぶりのJpnⅠ優勝。さらに父の評価を高める勝利となりました。

「スタリオンシリーズ競走」は、一般社団法人JBC協会(ジャパンプリーダースカップ協会)が産地の支援を得て、優勝馬の馬主や生産者に種牡馬の翌年度種付権利を副賞として贈呈する競走です。

※生産牧場が海外の場合は付与対象外となります。

